相対性家族

2022/9/5
第 1稿

作者名：高山康平

配役

・母・早歩　熊谷ニーナ
・父・鈍助　坂口候一
・長男・保長　川村昴志
・次男・順次　粂川雄大
・婆ちゃん・若　玉木美保子

（回想パート）
・父・鈍助　大平原也（A）
・母・早歩　梅田脩平（B）
桜庭啓

第1幕

中央に土が盛られて山になっている。（風や川、鳥など自然の音が混沌と入り混じって流れる。）

（自然の音が止み、時計の進む音がする。同時に、照明が太陽の光が移ろうように動き、最後には弱まっていく）

暗転

しばしの間。後、暗闇から婆ちゃんの声

婆ちゃん（最初はボソリと小さく）思うに・・・（次はややはっきりと）思うに、時間というのは初めからあったんじゃなくて、物と物。人と人、との調和がズレ始めた時に生まれたんじゃないかしら（と喋っている間にゆっくり明転してゆく。土の山があったところには、大きな緑色の箱が置かれている）

婆ちゃん　そう、だから時間というのは、私とあなたの間にあるの。私とあなたの間の差。それが時間。私とあなたの間の差。そこに言葉ができて、お金が流れて、家が建って街ができた。（と喋る間に、舞台美術が運ばれてくる）

婆ちゃん　差が大きければ大きいほど、物と言葉がたくさんできて、世界は豊かになっていったの。でも・・・でもね。いえ、やめとくわ。だって、いくら言葉で埋めようとしたって、あなたとの差は埋まらないもの

暗転

第2幕

明転

母、下手より登場。舞台上を忙しなく歩き回った後、上手前方に立つ。

母　確かに人よりはせっかちかもしれないけど、世の中が速すぎんのよ。速すぎる人の流れや時代の流れについていかなきゃって必死だったの。でもついていくだけじゃダメだった。周りより速くないとこの世の中じゃ成功できないの。だから私はますます速くなっていった。速く歩いて速く喋って、周りを追い抜いていったの。子供を二人産んで育てて、周りに足を引っ張られながら、それでもこうして家が建つほどにはやってこれたのは、私が人より速く動いてきたからよ。それなのにうちの夫ときたら、マイペースにもほどがある。私から見たらまるでスローモーションよ。この間なんてね、朝ごはんを作るって言ってね（父の方を見る）

父、下手から非常にゆっくりとしたスピードで登場。舞台上を歩き回る。

父、食材をゆっくり点検して、ゆっくりと調理する動作をする。

（食材、料理はレゴブロックか積み木などで表現するか）

母　昼になっちまうわ！　そして事実、出来上がった頃にはお昼の時間になってたの。まあ、少し盛ったけど、とにかく私にはこう見えてるの

母、上手から退場

父、下手前方にやってきて立つ

父　確かに私はいささかマイペースかもしれない。だが、世の中の方があまりに速すぎるんだ。これほど速い人の流れや時代の流れについていく必要なんてどこにある？　物事には踏むべ

き順序というものがあるのだ。その点、うちの次男ときたらあまりにひどい

次男、上手から後ろ向きにやってきて歩き回る。

父　私から見たらまるで逆再生しているみたいだ。すべてがアベコベなんだ。

次男、机に座り勉強を始める。そこへ母がやってくる

母　ねえ、驚かずに聞いてね

次男　えーーー！！

母　なんで驚くのよ！

次男　驚くなってことは驚けってことでしょ？

母　もういいわよ。受験勉強は進んでるの？

次男　むしろ戻ってるよ。

母　戻ってる？　また浪人する気なの？

次男　違うんだよ。（次男、焦って興奮しだす）思ったんだ、基礎は数学が大事だって。公式が僕をまだ十分に覚えてないのに問題的な応用を解いても腕押しに暖簾、釘にヌカ（と喋り続ける）

父　暖簾に腕押し、ヌカに釘、だろ。使い方も違う。と、少し大袈裟かもしれないが、私にはこう見えているんです

父、下手から退場。母、上手から退場。次男、上手の手前に進む。

その途中、長男が下手から登場すると、全員の動きが停止する。

長男、舞台中央にくると、立ち止まり客席を見る。

長男、上手奥に行くと座って動かなくなる。と、同時にそのほかの人たちも動き出す。次男、上手前方に立つ。

次男　そそっかしい所があるかもしれない確かに僕には。でも、忙しないからだよ世の中が。ないんだよ、立ち止まってゆっくり考える暇が。応えなくちゃいけないでしょ？　いつだって、周りの期待に。それなのに、母さんときたら

母、上手から文庫本（吾輩は猫である）を持って登場

母　吾輩は猫である

次男　早送りだよ僕から見たら。まるでないんだ、周りに合わせる気が。

母、文庫を高速でめくりながら、歩き回る。

文庫をめくりながら、文庫を閉じ

母　つまり、猫が死んだのね（文庫を投げ捨てる）

次男　間違ってないけどさ

母　（ポケットから『こころ』を取り出す）こころ、（パラパラめくり、閉じる）先生が死んだのね（文庫を投げ捨てる）

次男　ちょっと極端かもしれないけど、こう見えてるんだ、僕には

父、登場すると音楽が流れ、母、父、次男の三人が舞台上をそれぞれのスピードで歩き回る。

暗転

第3幕

明転

父、上手手前で、机に向かって座っている。（全く動かずに考えている）

おもむろに動き出し、ペンをとり、原稿に取り掛かろうとする

そこで電話が鳴る

父、立ち上がり、電話（奥）にゆっくりと向かう。が、間も無く電話に到達しようという所で電話が鳴り止む。

父、机の方に戻ってゆき、席に座ろうとしたところでまた電話が鳴る。

父、電話の方へとゆっくり引き返す。が、受話器に手を延ばした所で電話が切れる。

父、振り返って席に戻ろうとする。と、また電話が鳴り、今度は取る。

父　はい

婆ちゃんの声　もしもし、私です。若です。

父　ああ、お義母さんですか。お元気ですか

婆ちゃんの声　あんたは誰？

父　鈍助です早歩の夫の

婆ちゃんの声　早歩って私の娘の？　あの子結婚したの？

父　ええ、20年以上前です

婆ちゃんの声　ああ、そうですか。あの、ちょっとそっちに行きますからね

父　お義母さん、うちにいらっしゃるんですか

婆ちゃんの声　私はあんたのお母さんかね？

父　いえ、そうじゃないんですが

婆ちゃんの声　じゃ、あんたは誰？

父　私は早歩の夫ですよ

婆ちゃんの声　はあ、なんだか分からないけど、とにかくそっち行きますからね（電話切れる）

父、受話器を置き、席に戻っていく。舞台中央くらいまできたところで母が下手から帰宅する。

母　ただいま。（コートを脱ぎ捨てるなり、部屋中を物色して）ねえ、私の手帳知らない？

父　（母の脱ぎ捨てたコートをゆっくり拾いに行く）君の手帳のことは知ってるけど、今どこにあるのかまでは

母　（言葉を遮り）ないのよ。週末の予定が分からなくて困っちゃった

父　そういえば君のお母さんから電話があって

母　電話？　そう、電話してた時に開いてメモしたんだった（と、電話のところに行って自分の行動を再現している）

父　こっち来るんだって

母　そうそう。こっちに来たのは覚えてるの。その時、手に飲み物持ってた。ってことはやっぱり電話の時にそのままどこかに

次男、上手から登場

次男　ああ、どうしたらいいかな

母　何が？

次男　解けないんだよ、なかなか

母　何が？

次男　問題だよ

母　何の？

次男　順列だよ。数学の問題。

父　いいか、そういう時はゆっくり考えて

母　速く考えんのよ。速く手を動かして速く頭を回転させんの

次男　わかんないよ訳が。ゆっくり速く考えろってこと？

父　ゆっくりだ

母　速くよ

（ここから同時に喋る）

次男　分からなくなっちゃうな余計に。どっちかにしてよ。ゆっくりなのか速くなのか。速くなのかゆっくりなのか。問題を数学がゆっくりで速く考えるなんて猫が宇宙で昼寝するみたいに聞こえるんだよ僕には。宇宙で猫が昼寝するみたいだよ。宇宙って普通夜でしょ？　そこで猫が昼寝するんだよ？そもそも宇宙に猫っているの？　宇宙猫？

母　いい？　速く動くってことはその分、頭が速く回転してるってことなの。時間てのは限られてるんだからその中でいかに速く動けるかが大事なの。それは数学も一緒。犬が賢いのは犬が速く動けるからよ。犬にナビエ・ストークス方程式を解かせてご覧なさい。犬は「わん」って答えるけどね、わん、つまり1はすべての始まりの数、ひいては宇宙全体が含まれてると言っても過言じゃないの。犬が「わん」って答えるのよ。賢いと思わない？

父　いいか？　ゆーっくり考えることによってだな。それまで見落としていた視点から物を見られるんだ。ナマケモノってのがいるだろう。ナマケモノはトラやジャガーが見落としている、地球の真理に目覚めているんだ

ドン。と足を踏む音と同時に長男が立ち上がる。と、他の家族の動きが完全に停止する。（照明チェンジ）

長男、舞台を横切って下手奥に行くと、飲み物や食べ物を持って、上手奥に戻ってゆき、座る。と、また他の家族が動き出す。

母　とにかくね、そういうのは自分で考えるの

父　そうだ。最後には自分しか頼りにならん

次男、寝転ぶ

父　勉強しないのか(持っていたコートをようやく掛ける)

次男　自分で考えてるんだよ

母　そうだ。買い物に行かなきゃ。何か食べたい物ある？

父　そうだな。私は

母　ないなら適当に買ってくるけど、ってかあなたも一緒にいらっしゃいよ

父　そうだな

母　(コートを羽織り)外寒いからコート着て行って

父、コートを取りゆっくり羽織る。が、母、父を待たずに先に下手から出かけていく。

次男、本を読み始める

父　(コートを着ながら)考えてるんじゃなかったのか

次男　考えた結果、あとで考えることにした

父　(順次)は、どうしていつも本を後ろから読むんだ

次男　気になるじゃん。どうなるのか

父　で、どうなるんだ

次男　死ぬっぽい。みんな死ぬね、最後には

父　ああ、だが死ぬまでが大事だぞ(ようやくコートを着て出かけようとする)

母　(荷物を持って下手から帰宅する)あら、あなたどこか行くの？

父　あ、いや、買い物に

母　買い物なら行ってきたわよ。

次男　あ、そうだ買ってきて欲しい物があるんだけど

母　そういうことは買い物に行く前に言うものよ。さあ、ご飯の支度しましょ。(次男)、テーブルの準備してちょうだい(コートを脱ぎ捨て、下手奥へ)

次男　はーい

次男、奥から箸やら皿やらを持ってきては並べる。並べる順番に混乱してあれこれ組み替えている

父、母が脱ぎ捨てたコートを拾って掛ける。

母、料理を持ってやってくると、一同、席につく。

母　いただきます

一同、食べ始める。

母、料理をすべて崩してコップに入れ、それを飲み干す(レゴ？　が床に落ちる)

母、立ち上がり、高速で歯を磨くと、コートを着る

母　ジム行ってくる(と出かけていく)

次男、皿いっぱいに料理をよそってそれを頬張る(床にレゴ？　が落ちる)

父　食べ過ぎじゃないか

次男　カロリー消費するんだよ。ずっと勉強していると

父　そうか

次男　(立ち上がり)トイレ行ってくる(上手からはける)

父、立ち上がると、箒で床に落ちた食事を掃く

暗転

第4幕(回想)

明転。

若き父と母が、舞台上に離れて座っている。互いに背を向け合っている。

父、身体の向きを変え、母の方を見る。が、母が背を向けているのを見ると、また向き直る。

母、身体の向きを変えて父を見る。が、父が背を向けているので、向き直る。

父、再び母の方を向くと今度は立ち上がってゆっくり近づいていく。

が、母のところに到達しそうなところで、母、立ち上がって歩き去ってしまう。

暗転。

第5幕

明転

婆ちゃん、舞台中央に座ってぼんやりしている。

徐に立ち上がると、部屋を歩き回って物色し始める。

物に話し掛けて床に落とし、次の物を取って話し掛けを繰り返す。

下手から母が帰宅する。婆ちゃんを見つけるなり凍りつく。

母　お母さん！　どうしたの？（婆ちゃんに近寄る）一人で来たの？

婆ちゃん　あんた誰？

母　早歩よ。お母さんの子供

婆ちゃん　あんたはどっから来たの？

母　仕事に行ってたのよ

と婆ちゃんが母をいきなり叩く。背を向けて再び物色を続ける。

母　はあ？　ちょっと何すんのよ(詰め寄る)

次男　(上手より登場)どうしたの？

母　順次、あんたお婆ちゃんが来てたこと知ってたの？

次男　悪いけど、集中してたんだよ勉強に。だからお婆ちゃんが来てたとしても、気付かないよ。それくらい集中してたんだ。・・・ってお婆ちゃん！！　いつ来てたの？

父　(下手から登場)ああ、お義母さん、もういらしてたんですか(コートを脱ぐ)

母　(下手の父に詰め寄る)あなたお婆ちゃんが来ること知ってたの？

父　昨日、電話があって

母　電話があった？　どうして言わないの

父　言ったさ。言ったのに君が

母　言った？　聞いてないわよ。

父　そう、君は聞いてなかった

母　聞いてなかったってわかってるならもう一度言いなさいよ

父　それは悪かったけど今更どうこう言っても

母　そうよ今更どうこう言っても仕方ないんだから、どうするのか考えてよ。しばらく居るつもりかしら

婆ちゃん　(次男に)あんた誰？

次男　お婆ちゃんの孫だよ

父　私が面倒見るよ

母　あなたはちゃんと仕事をしてよ。締め切り近いんでしょ

父　そうしたらあとは順次しか

母　そうよ。あの子、どうせずっと家に居るんだし

次男　(自分の名前に反応して下手に)え、僕が面倒見るの？　勉強があるんだけど

母　いいじゃない。こう何か試練に出会った時に脳は目覚めるものよ

父　賢者は勉強以外のことからも学ぶものだぞ

次男　言わないでくれよそんな適当なこと。どうすんのさ、それでもう一年浪人したら

父　それはお前の実力不足だ

母　そうよ。他人のせいにしちゃダメ。自分の力で乗り越えなきゃ

などと話している間に、婆ちゃんは物を物色しては落としていく

母　(婆ちゃんに)っていい加減にしなさいよ！

婆ちゃん、凍りつく。とわなわなと泣き始め、座り込む。

婆ちゃん　ごめんなさい。叱らないで。いい子にするから。ね？　ママ、お願い。怒らないで

次男　ママ？

母　なんか、子供に返ってない？

父　タイムスリップしてるな

母、父、次男、顔を見合わせると、婆ちゃんの元(上手)に寄る。

母　いい子だね。ちゃんと謝れたね。

次男　お菓子、食べようね、あとで一緒に

父　おい今何歳くらいなんだ？

母　・・・お婆ちゃん、今何歳なの？

婆ちゃん　私？　私、6歳

母・父・次男　六歳！？

父　これはまたなかなか

次男　6歳児ってどう接すればいいんだっけ？

母　うーん・・・任せた！（一人離れて下手へ）

父・次男　え？

母　任せる。３人で悩んでも仕方ないでしょ？　私は買い物に行ってきます。だって、

誰かが買い物に行かなくちゃ

父　だったら私が

母　あなたは遅いでしょ

次男　じゃあ僕が

母　あなたじゃ務まらない

婆ちゃん　私行く！

母　あなたは・・・ええ！？

婆ちゃん　私もお買い物ついていく

母　ダメよ。お婆ちゃんはお家で留守番してて

婆ちゃん　やだ！　行きたい！　お買い物行く！

父　じゃあ、任せたぞ

母　え？

次男　行くんでしょ？　買い物。全員で行っても仕方ないし

婆ちゃん　やったあ！（と、下手に行って母の腕を掴む）

母　あんたたちね！

婆ちゃん　ママ、早く行こう

母、何か言いたげだが、結局飲み込んで婆ちゃんと出かけていく

父、次男、胸を撫で下ろし、それぞれ座る。

次男　お婆ちゃん、ずいぶん戻っちゃったね

父　戻った？　進んじゃってるだろ

次男　戻るでしょ？　時間が戻ってる

父　それはボケが進んでるって言うんだ

次男　一緒だよどっちだって

沈黙。

母　(慌てて帰ってくる)大変！

父　(立ち上がり)どうしたんだそんなに慌てて

母　お婆ちゃん、いなくなっちゃった

父・次男　ええ！？

母　ちょっと目離した隙にひょいといなくなっちゃって

次男　徘徊ってやつだよ、それ

父　よく探したのか？

母　探したわよ。でも見つからないの

父　みんなで探しに行こう

一同、出かけてゆく

しばらくして、婆ちゃんが下手から登場する。舞台中央に椅子をおいて座る。

婆ちゃん　おや、誰もいないねえ。誰もいない。まあいいか、こうして待つより仕方ない。花のほかには松ばかりってね(などとぶつぶつ言っている)

長男、立ち上がり、舞台を横切って下手に行くと、食べ物などを持ってまた上手に戻っていく。婆ちゃん、長男の動きを目で追っている。長男、元の位置で座る。

父、戻ってくる(息が上がっている)。家に上がり、婆ちゃんの姿を見るとズッコケる。

父　お義母さん！

婆ちゃん　あんた誰？

父　どこ行ってたんですか

婆ちゃん　あんたはどこから来たの？

次男、母も戻ってくる。

母　お婆ちゃん！　もうどこ行ってたの

父　自分で帰ってきたみたいなんだ

母　もう人騒がせなんだから

婆ちゃん　騒いでるのはあんたさんかな？

父　ともかく無事でよかった

母　さ、ご飯にしましょ(コートを脱ぎ捨てる)

母、下手奥に消える。次男、皿や箸を並べる。父、母のコートを拾って掛ける。自分もコートを脱いで掛ける。

母、料理を持ってやってくると、一同、席につく

婆ちゃん　わあ、美味しそうね！

母　でしょ。お婆ちゃんが好きそうな物たくさん買ってきたのよ(と皿によそってあげる)

途端、婆ちゃん、お皿を跳ね除けて床に落とす。

母　はあ？

婆ちゃん　お腹空いてない

母　はあ？　せっかく作ったのに

婆ちゃん　だからお腹空いてないって言ってんじゃん。ってかまじウザいんですけど

次男　なんか思春期に戻ってない？

父　案外今っぽいんだな

婆ちゃん　クソババア！

母　クソババアはあんたでしょ！

婆ちゃん　（席を立つ）私眠くなっちゃった、寝るわ（上手から退場）

ピリッとした気まずい空気。

母、料理をすべて崩してコップに入れ、それを飲み干す（レゴ？　が床に落ちる）

母、立ち上がり、高速で歯を磨くと、コートを着る

母　ジム行ってくる（と出かけていく）

父　（次男に）お前は何も気にするな

次男、頷くと、皿いっぱいに料理をよそってそれを頬張る。先ほどより更に多く食べている（床にレゴ？　が落ちる）

次男　（立ち上がり）トイレ行ってくる（上手からはける）

父、立ち上がると、箒で床に落ちた食事を掃く

暗転

第６幕（回想）

若き父と母、舞台中央で向かい合って口論をしている。

明転。

父　人の話を最後まで聞けよ

母　聞いてないのはあなたの方でしょ？　私はもう何度も言ってるわよね？　結婚する時だって言ったじゃない。買い物だって料理だってちゃんと私がやる。だから私の仕事のことに口を出さないでって。

父　別に口を出してるんじゃない

母　出してるじゃない

父　君を心配しているんだ

母　私はね、あなたに心配されるほど弱くないの。もう放っておいてよ。

母、退場。

父　ちょっと、待ちなさい

暗転。

第7幕

明転

母、舞台中央に座っている。片方の足にギプスが装着されており、松葉杖を床についている。苛立たしげに貧乏ゆすりをしている。

下手より父登場。母の姿を見てズッコケる。

父　一体どうしたというんだね

母　一体どうしたって？　骨折よ。骨を折ったの。見てわからない？

父　それはわかるが、

次男、婆ちゃんの手を取って下手より帰宅。

次男　（段差を上がり）お婆ちゃん、気をつけてね、あるから

婆ちゃん　何があるって？

次男　その

婆ちゃん　（段差につまずき）痛い

次男　ああ、そう。段差。

婆ちゃん　段差があるのはよく分かったから、起こして頂戴

次男　ごめんごめん

次男、婆ちゃんを起こす

次男　ただいま。いやあ、すごく歩くね、お婆ちゃん。びっくりしちゃった

父　お前、びっくりしないのか

次男　いや、だからびっくりしちゃったよ、お婆ちゃんたら・・・ってええええ！？

どうしたの、お母さん？

母　だから骨折だって言ってるでしょ？（と思わず立ち上がるが）いったああい！

（とよろける）

父、次男、とっさに母を支えようとするが、母、それを振り払うと、松葉杖で自分の体を支えて立ち上がる。

母　歩いてたのよ。そしたらね、若い男が私を追い抜いたわけ。

父　ああ、それはまずい

母　私はね、追い抜かされるのが嫌いなのよ。だから、その男を抜き返してやったの。そしたら、そいつがまた追い抜こうとしてくるもんだから抜かされないように必死に歩いたのよ。そうなったら急には止まれないでしょ？　そしてそれは車の方も同じだった。二人仲良く車にドーンよ。

父　なんということだ

次男　利の漁夫ってやつだね

父　リノギョフ・・・？　漁夫の利だろ。そして使い方が違う

母　でも大丈夫。私、負けないから。今まで通り買い物にも行くし、料理もするし、みんなは何も心配しないで

父　大丈夫なわけないだろ

母　大丈夫なの

次男　大丈夫じゃないでしょ絶対

母　大丈夫だ！って言ってるでしょ！（杖を突きつける）　松葉杖だってうまく使えば

母、松葉杖をつきながら舞台上を歩く。気が急いて足がついてこない。

父、それを見て、フォローするように後からついていく。が、父が後ろについてくると、母立ち止まり、父を睨む。

母、父に追いつかれまいとスピードを上げようとする。父、母についていくと、母、また立ち止まり父を睨む。

母、歩き出しスピードを上げようとするが

母　ああ！　もうなんでこんなに遅いのよ！

父　買い物なら、私が行くから

母　大丈夫、私が行くから

婆ちゃん　私が行く

母　お婆ちゃんも行きたいの？　いいわよ

婆ちゃん　やったあ

次男　無理だよお婆ちゃんも連れて行くなんて

母　じっとしてらんないのよ。

母、コートを着て出かける。婆ちゃん、母について行く

父、次男、立ち尽くしている

次男　どうしよう

父　お前、後からついて行きなさい

次男　分かった

次男、出かけて行く。

父、中央に座る。

沈黙

長男、立ち上がる(父、動かなくなる)と、舞台を横切って下手へと向かう

食糧を手に持ち、上手へと戻って行こうとすると、婆ちゃんが一人で帰ってくる。

長男、止まって婆ちゃんを見る。婆ちゃん、長男に近づいて行く。

婆ちゃん　あんたは誰？

長男、手で自分の片目を覆う

婆ちゃん　あんたは大きな目をしているね

長男、上手に向かって歩き出す。

元の位置に来ると座る。と、父、動き出し

父　ああ、お義母さん、一人で帰ってきたんですか？

婆ちゃん　私はあんたのお母さんかね？

次男、慌てて帰ってくる。

次男　たいへんだ、たいへんだ、たいへんだ、たいへんだ、

父　どうした？

次男　へんたいなんだ！

父　変態？

次男　お婆ちゃんが・・・

父　お婆ちゃんが、変態なのか？

次男　そうじゃなくて！　いなくなっちゃったんだよ！

婆ちゃん　（次男の後ろに立ち）あんたはどこから来たの？

次男　え、・・・どこからって

婆ちゃん　後ろはよく見たのかい？

次男　え、後ろ（振り向く）　ああ、お婆ちゃん

婆ちゃん　で、あんたは誰？

母、帰ってくる（やや疲れている）

母　ああ、お婆ちゃん、戻ってたの（コートを脱ぎ捨てる）

父　大丈夫だったか？

母　大丈夫だって言ったでしょ？　さ、ご飯にしましょう

母、下手奥に消える。次男、皿や箸を並べる。父、母のコートを拾って掛ける。自分もコートを脱いで掛ける。

母、料理を持ってやってくると、一同、席につく。

婆ちゃん　わあ、美味しそう！

母　お婆ちゃん、これ大好物でし・・・あ

婆ちゃん、ご飯を払い除けて床に落とす。

母、怒りを堪えている。

婆ちゃん　私、お腹空いてない（立ち上がって上手から出て行く）

父　（母に）　おい、大丈夫か？

母　（堪えていた怒りを飲み込む）　ふう、大丈夫よ

母、いつものように食事をコップに崩して入れ、それを飲み干す（レゴ？　が床に落ちる）

母、立ち上がり、高速で歯を磨くと、コートを着る

母　ジム行ってくる

父　ジム？　無理に決まっているだろ

母　じゃあ散歩！　散歩に行ってくる（と、出かけて行く）

父　（次男に）お前は何も気にするな

次男　ねえ、僕がいけないのかな　（不安そうにしながらご飯を口に詰め込む）

父　そんなわけないだろ

次男　じゃあ、どうして気にするなんて言うの？　気にするなってことは気にしろってことでしょ？

父　そんなことない

次男　そんなことないってことはそんなことあるってことだよ

父　別にお前は何もしてないじゃないか

次男　そう、何もしてないんだよ僕は。何かしなくちゃいけなかったのに、何もしなかったんだよ僕は（ご飯を詰め込む。父、その手を握り止めるが、それを振り払ってさらに食べ続けると、立ち上がり）トイレ行ってくる（上手からはける）

父、立ち上がると、箒で床に落ちた食事を掃く

暗転

第8幕(回想)

明転。

若き父、立っている。母、やってくる。

父　なあ、話したいことが・・・

と、奥で赤ん坊が泣き始める。父、奥に歩き出す。

若き母、父を追い抜いて赤ん坊を抱き上げてあやしながら歩き回る。

母　何？　話たいことって。

父　実は今の仕事・・・

と、電話が鳴る。父、電話に向かおうとすると、母、赤ん坊を父に預けて電話に出る。

母　もしもし・・・はい、そうです。そうです。は？　いや、違います。違いますね。はい。違います。はい。全然違います。はい。

母、電話を切る。

母　間違い電話だった。で？

父　辞めようと思うんだ？

母　え？　会社辞めるの？　今？　子供産まれたばかりなのに？　辞めてどうするの？

父　独立する。知り合いに話したら原稿の仕事をくれるって言うんだ。もちろん始めはそれだけじゃやっていけないけど、そこから少しずつ仕事を増やしていけるように（などと話している間に母は電卓を叩いている）

母　わかった。大丈夫。

父　え？

母　まず一年。私がなんとかするから。やってみたら？

父　いいのか？

母　いいから、お風呂入れてきて。

父、赤ん坊を連れて退場。

暗転。

第9幕

明転

次男、舞台中央に座って勉強している。

次男　りんご、かき、なしを使って、7個入りの果物かごを作りたい。何通りの果物かごができるか。ただし、一つも入らない種類があってもよいとする。・・・うーん。りんごが7個のときが一通りでしょ。りんごが6個のときが二通りあって、りんごが5個のときは、かきが2個でなしがなしのときと、なしが2個でかきがなしのときとで・・・ん？　なしがなしのときとかきがなしのとき？　はあ？　かきがなしでなしがかきで、りんごはりんごのままなのか？

婆ちゃん、上手から登場する

次男　いやいや、りんごが5個あって

婆ちゃん　食べたい！

次男　え？

婆ちゃん　りんごが5個もあるなら一つくださいな

次男　いや、りんごはないんだよ

婆ちゃん　ないの？

次男　そう、りんごがなしの時はかきが4個となしが3個のときと、

婆ちゃん　じゃあかきをちょうだい

次男　いや、だからかきもないんだよ

婆ちゃん　なしはあるの？

次男　なしがあるかって？　なしがあるならあるがなしで、かきがなしのとき、でもなしはあるだから、なしもなしでなしであるわけだから

母、下手より登場。

母　お婆ちゃん、勉強の邪魔しないで

婆ちゃん　邪魔者はどっちだい

母　いいから、あっち行こう

婆ちゃん　りんごをくれないんだよ

母　りんご？

次男　問題の数学だよ。かきはなしで、なしはあるけどあるはなしで

母　ちょっと落ち着きなさいよ

婆ちゃん　ほらやっぱりあるじゃない

母　これは例えなの。本当はないのよ

婆ちゃん　ないのかい。ないものを数えてどうするんだい

次男　あーーーー　（と、立ち上がり台所から大量に食べ物を持ってくると食べ始める）

母　ちょっとどうしたの

婆ちゃん　あーやっぱりあるんじゃない

次男、食べ続ける。父、下手より登場。

父　おい、どうした

婆ちゃん　（次男に）太って動けなくなるよ、一人で食べたら

次男、食べ続けていたが、吐き気を催すと、トイレに駆け込む

父、次男の様子を見て何か思い当たる

母　大丈夫かしら。あの子もストレスたまってるのね（と腰掛ける）

父　おかしくないか？

母　何が？

父　あいつはいつもあんなに食べるのに少しも太らない。

母　カロリー使うのよ。勉強してると

次男、戻ってくる

父　お前、トイレで何をしていた？

次男　何って、トイレだよ

父　そうか。じゃあ、戻していたんじゃないんだな

母　ええ？

次男　・・・・・・違う。違うよ。違うって。

父　違くないだろ

次男　違くなんかない。違くなんかないよ。ただ、時々すごく混乱するんだよ。お腹いっぱいになると集中力がなくなって、集中が途切れると集中できなくなるんだ。

母　ちょっと落ち着きなさいよ！　ねえ、何言ってるの？

次男　今年こそ来年は受からなきゃって叫ぶ僕の声と、また去年も来年と同じになるんじゃないかって喚く僕の声が響き合って、どっちが僕でどっちが僕なのかわからなくなるんだ。不安みたいな波が打ち寄せて砕けちるんだよ頭の中で。津波みたいだ。洪水みたいなんだ。息ができないだろ水の中じゃ息もできない。だから吐き出すんだよ。吐き出さないと溺れちゃう。水の中で。必死なんだよ溺れないようにするだけで。息を吸い込むだけで。

と、一通り喋ると一度落ち着く。

次男　・・・だから、もういやなんだよ。人の期待に応えるのは。

次男、前向きに歩いて上手から退場する。

父、次男の後を追うように数歩進むが、無力に立ち止まると、何か訴えるように母の方を見る。

母、体を背ける。父、なおも詰め寄るが、母、父に背を向ける。

父、諦めて母に背を向ける。と、母、父に向き直るがすでに父は背を向けている。

母、コートを着る。

婆ちゃん　どこかお出かけかい？

母　うるさい！　（と出かけていく）

父、椅子に座る。婆ちゃん、部屋の中をうろつく。

と、長男が音を立てて立ち上がる。（父、動かなくなる。婆ちゃん、その場で立ち止まり、長男を目で追う）

長男、舞台を横切って下手に移動する

婆ちゃん　あんたは誰？

長男、立ち止まり、婆ちゃんの方を向くと、片目を手で覆う。

婆ちゃん　言うてごらん

長男　僕は・・・僕は、誰でもない

婆ちゃん　あんたはどこから来たの？

長男　僕は、暗いところから来て、暗いところに帰っていくんだ

婆ちゃん　あんたはやっぱり目が大きいよ

長男、元の位置に帰っていく

婆ちゃん、長男を目で見送りながら歩き出すと、父にぶつかる。

父、椅子からコロンと転げ落ちるが、やはり動かない。

長男、座る。と、父動き出し、起き上がる。

母、足を引きずりながら帰ってくる（疲れている）。

父　おい、大丈夫か

母　大丈夫よ

母、コートを脱ぎ捨てて台所へ向かう

父　夕食なら私が作るよ　（と、母に追いつく）

母　私を追い抜かさないでよ

父、立ち止まる。母、台所へ。

父、母のコートを拾い上げると手に持ったまま何やら考え込んでいる。

母、食事を持ってやってくる。

母　お婆ちゃん、できたから席について

と、婆ちゃん、母が手に持っていたご飯を床に叩き落とす。

沈黙。

母、婆ちゃんを睨み付けると、婆ちゃんを叩く。

母　何なのよ？　私への仕返しのつもり？　いつまでそうやって昔のこと根に持ってるのよ。そっちがそういうつもりなら、私だってもうお母さんの面倒見ないから

母、父からコートを奪って出かけていく。

父　おい

母、退場。

父、落ちた食事を拾う。

暗転。

第１０幕（回想）

明転。

若き父、机に向かって物を書いている。若き母、後ろから近づいてくると覗き込む。

母　「アイの上には存在があり　アイの下にはウエオがある　アイの中には穴の空いた靴下があり　アイの外には虚栄心がある」何これ？　あなたが書いたの？

父　そうだよ。

母　なんだかよくわからない。

父　ゆっくり味わってご覧よ。

母　「アイの中には穴の空いた靴下が・・・」やっぱりよくわからない。でもいいと思う。いつかこういうの仕事にしてみたら？

父　できるかなあ、仕事に

母　あなた人と同じことしたってうまくできないんだから、人と違うことした方がいいのよ。ね？　完成したらまた読ませてね。（と退場する）

父　おおい。これで完成なんだよ。（と母の方に呼びかけるが、もう行ってしまっている。）

父、正面に向き直る。

暗転。

第11幕

明転。

長男、舞台中央に座っている。遠くの光を見るようにして客席を見ている。

長男　あんたは、誰？（片目を覆う）僕は、誰でもない。・・・あんたはどこから来たの？・・・僕は、暗いところから来て、暗い所に帰るんだ。・・・あんたは、大きな目をしているね。・・・暗い所じゃ・・・暗い所じゃ、大きな目は役に立たない

長男、人の気配を察すると、立ち上がり、上手奥の定位置に戻って座る。

父、下手から登場、オロオロとうろつく。

母、下手から登場。コートを脱ぎ捨てる。

母　どうしたの？　そんなにオロオロして。

父　お前、お婆ちゃんがどこにいるか知らないか？

母　いないの？

父　いないんだよ

母　あ、そう。

父　一人で出かけて帰れなくなってるんじゃないかな

母　大袈裟よ。これまでだって一人で帰ってきたでしょ？

父　これまでこんなに長く帰らなかったことないじゃないか

母　大丈夫よ、ああ見えて結構しっかりしてるんだから

父　心配じゃないのか？

母　心配したって仕方ないでしょ？　しばらく待ってみて、帰らなければ警察に届け出ればいいじゃない

父　そういうことじゃなくて、心配する気持ちが湧いてこないのか？

母　何？　私が冷たい人間だって言いたいの？

父　そうじゃない

母　いろいろあったのよ、お母さんとは昔に。何も知らないくせに勝手なこと言わないでよ

父　・・・・・じゃあ、このままお婆ちゃんが帰ってこなくてもいいと言うのか？

母　そうは言ってない。でも・・・もしそうなったら、それはそれで仕方ないとは思う。

沈黙。

父　わかった。

母　誤解しないでよ。

父　誤解なんかしてない。私は完全に理解してるよ。

母　理解できるはずない！　理解されてたまるもんですか。

父　ああ理解できんね！　少しも理解できないよ。君が私を理解していないように、私は少しも君を理解していないよ。私が君を理解していないように、君は少しも私を・・・（これまで掃いて片付けてきたレゴが貯められた容器をひっくり返す。レゴブロックが二人の間にこぼれ散らかる）

沈黙。

父　私は、お婆ちゃんを探しに行ってくる。

父、出かけていく。

母、中央の椅子に座る。

沈黙。

長男、立ち上がる（母、動かなくなる）

長男、舞台を横切り下手へ行くと、食糧を持って戻ってくる。定位置に戻りかけたところで立ち止まる。

長男　もし・・・・・・もし、もう誰も帰ってこなくて、もう誰も部屋から出てこないとしたら、お母さんはどう思う？（振り向く）想像してみてよ。もう誰も帰ってこないし、誰も部屋から出てこない。お母さんはそれで満足？ねえ。（と、母に近づいていく）ねえ。お母さんはよく大丈夫って言うけど。大丈夫じゃないことを避けてきただけだよ。だっ

て・・・僕は少しも大丈夫じゃない。僕は。もう暗い所には帰りたくないんだ。ねえ・・・ねえ、お母さん

母（動き出し）じゃあどうして欲しかったのよ！　私がいけない？　私が間違ってるの？

長男　それはわからない。誰がいけないかなんて。そして、どうでもいいんだよそんなこと。とにかく、みんないなくなった。もう、誰も帰ってこないし、誰も部屋から出てこない。

母　もうやめて。お願いだから勘弁してよ。（と、下手に逃れていく）私はただ、誰にも迷惑かけたくなかったの。自分の力で人生を切り拓いてきただけ。そして、あなたたちにもそうやって生きて欲しかったの。

長男・父　でももうみんないなくなった。もう誰も帰ってこないし、誰も部屋から出てこない（言いながら父、下手より登場）

母、乱れて、部屋を散らかしながら、上手に逃げていく。

母　私なりに家族のために尽くしてきたの。家族のためにできることは何でもしてきた。でも、最後には自分で自分の責任を取るしかないじゃない。何でも助けてあげられるわけじゃないのよ。

長男・父・次男　でもみんないなくなった。もう誰も帰ってこないし、誰も部屋から出てこない。

母、乱れて散らかしながら舞台中央にへたり込む。

母（正面を向いて）じゃあどうしろって言うのよ。今さら何ができるって言うの？

父　今さらできることなんてないじゃないか。

次男　もう手遅れなんだ、全ては。

長男　取り返しがつかない。時間は戻らないんだ。

母、へたり込んだまま、ゆっくりと上を見上げる。

（ここから同時に喋る）

次男　もう手遅れなんだよ、何もかも。これまで誰かに投げかけてきた言葉のどの一つを取ってももう取り消すことはできない。これまでに人に与えてきたどんな小さな傷も消えることはない。そうした言葉や傷が、あなたを僕から遠ざけて、あなたと私の間の差は広がっていく。あなたと私の間の差。そこに時間は濁流となって流れていく。津波みたいだ。洪水みたいなんだ。もはや言葉も届かない。すべて流れに飲み込まれてゆくんだ。もう誰も帰ってこないし、誰も部屋から出てこない。そこには深い川が流れているんだ。すべてを飲み込む深い川が。でも待って。すべてが飲み込まれたその後は？　すべてなくなったその後は？

長男　時間は決して戻らない。だから誰も立ち止まることを許されない。暗くて深い穴を行き先もわからず進むんだ。花が咲いても照らす光がここにはない。あんたは誰？　と問われても、誰も本当には答えられない。あんたはどこから来たの？　あんたはどこへ行くの？　誰も答えられないまま、立ち止まることもできず、私とあなたの間の差だけが広がっていく。私とあなたの間の差。真っ暗な海で波に揺られて漂うみたいだ。しがみついた物が一体何かもわからずに。誰も帰ってこないし、誰も部屋から出てこない。岬の上の灯台になれたらどんなにいいだろう。決してそこを動かず、光を、光を送るんだ。僕はここにいる。僕はここにいる、と。

父　一体どこで間違えたと言うのだ。木々は枯れ、花はしおれた。時間は戻らない。枯れ草ばかりの道を歩き続けるのだ。あなたと私

の間の差。そこに言葉ができた。だが、もはや言葉では届かない程、あなたは遠く顔も見えない。強い風にかき消されて届かなかった声が、行き場をなくしてこの部屋の隅で埃となって積もっていく。もう誰も帰ってこないし、誰も部屋から出てこない。すべては崩れ去った。それから？　それからどうする？　それからまた始め直すんだ。何もないところから、また始め直すんだ。

と、言い終わる頃、母、脱力し、深く眠り込む。

暗転。

第12幕(回想)

父の声　(囁くように)また始め直すんだ。また始め直すんだ。

明転

若き、父、座っている。その前を若き母が通りかかる。母、歩きながら本を読みノートのメモを取る。母、時計を気にしながらウロウロしている。と、腕に持っていたコートを落とすが、気がつかない。

父、ゆっくりと落ちたコートを拾い上げる。

父　お忙しそうですね。

母　あ、すみません。ありがとうございます。(コートを受け取る)

父　よくお見かけしますが、本当にお忙しそうだ。

母　別に忙しいんじゃないんです。ただ、ほら移動時間ってなんだかもったいない気がして。何かしてないと気が済まないんです。特にこうしてバスを待ってる時間が一番落ち着かなくて。

父　素晴らしい心がけですね。最近、葉っぱが色づき始めてるのはご覧になりましたか？

母　ええ、人が話しているのは聞いたんですが、直接は

父　ほら、そこ(と上を指差す)

母　(見上げる)まあ、こんなところにもあったんですね

父　見渡せばどこにでもありますよ。ただ、ゆっくり見ないと気がつかない。

母　ゆっくり。ですか。

父　そう、ゆっくり。です。

母、父の隣にゆっくり腰掛ける

母　風の音が・・・聞こえます。

父　水の音も。

ゆっくりと暗転。自然の音が大きくなっていく。

第13幕

明転。

母、舞台中央で眠っている。

目を覚ますとゆっくり体を起こし、散らかった部屋を眺め回す。

母、立ち上がると、散らかった物を片付け始める。が、気が急いて、よろけたり転んだりしてしまう。その度に

母　ゆっくり、ゆっくり

と、自分に言い聞かせる。

母、散らかった物を片付けていく。

下手から父が戻ってくる。父、立ったまま母を眺めている。

母、床に落ちているコートをゆっくりと拾いに向かう。

と、父歩き出し、母と一緒にコート拾って掛ける。

父も片付けに加わる。

上手奥より長男が登場。母、振り向き、長男に近づいていく。

長男も母に近づき、二人で一緒に物を片付ける。長男、片付けに加わる。

上手手前より次男登場、同様に母と一緒に物を片付ける。

家族全員で協力しながらどんどん物を片付けていく。

床に落ちたものだけでなく、家具類もどんどん舞台から撤去していく。

家具類が片付け終わると、平台も撤去する。

緑色の大きめの箱だけが最後に残る。

母、それを持ち上げようとするが持ち上がらない。

父、母の肩に手を置き、首を横に振る。

家族四人、揃って下手の奥へと退場していく。（それぞれ微妙に違うペースで歩く。が、誰かが速く行きすぎると、立ち止まって他が追いつくのを待つ。）

緑色の箱だけが残る。

暗転。

終幕